

軸となるべき「神道史」の再構築を期待してやまないのは、おそらく稿者だけではないだろう。

学会誌にとつて、ひいては著者にとつては「書評」ともつかぬ贅言に終始してしまつたが、斯学にとつて、著者の曰く「鬱蒼たる言葉の森」に挑むための新たな方位磁針を獲得したいま、「中世神道」研究は何処に向かうべきか、同門後学のひとりとして遙けき思いをめぐらせつつ綴らせていただいた。

(早稲田大学非常勤講師)

辻本雅史著

『思想と教育のメディア史』

——近世日本の知の伝達』

(ベリかん社・二〇一一年)

宇野田 尚哉

ここで取り上げるのは、辻本雅史『思想と教育のメディア史——近世日本の知の伝達』である。この書の著者が、研究書としては『近世教育思想史の研究——日本における「公教育」思想の源流』（思文閣出版、一九九〇年）の、一般書としては『「学び」の復権——模倣と習熟』（角川書店、一九九九年）・『教育を「江戸」から考える——学び・身体・メディア』（日本放送出版協会、二〇〇九年）の著者として、すでに評価の定まった日本思想史・日本教育史研究者であることは、周知の通りであるだろう。本書は、その著者が一九八九年から二〇一〇年にかけて発表した研究論文を集めた論文集である。まずは本書の構成を紹介しておこう。

I 貝原益軒の思想——教育・メディア・身体

第1章 近世における「気」の思想史・覚書——貝原益軒

を中心に

第2章 「學術」の成立——益軒の道德論と學問論

第3章 貝原益軒と出版メディア——『大学新疏』編纂と出版の努力

補論 益軒の『大学』解釈——「大学説」について

第4章 教育システムのなかの身体——貝原益軒における

学習

II 「知の伝達」メディア史の試み

第5章 「教育のメディア史」の構想——「文字社会」と出版文化

第6章 思想のメディア史の構想

第7章 素読の教育文化——テキストの身体化

第8章 日本近世における「四書学」の展開と変容

第9章 マス・ローグの教説——石田梅石と心学道話の「語り」

III 教育学と思想史の間

第10章 「江戸」への視線——日本教育史学の成立をめ

くって

第11章 「江戸」からの視線——「他者」としての「近代」

第12章 荻生徂徠の習熟論と教化論——近世教育思想試論

第13章 教育の社会化と学習社会に向けて——歴史からの

視点

同書の構成は以上の通りであるが、全一三章からなるこの重厚な書で著者が新たに提起しようとしている視座をより容易に理解するためには、第一章から読み進めるよりも、第Ⅲ部から読み始めたほうがよいように思われる。そこで著者は、次のように述べている。

……私自身も当初は……〔近世と近代を——引用者注〕連続の相だみてきた。つまり近代日本の国家主義教育の原型構造が、一八世紀末に成立してきたこと、そしてその原型構造が、近代における教育の制度や内容の相違を越えて、日本近代の教育と国家の構造を規定していることを論証した〔前著『近世教育思想史の研究』の成果を指す——引用者注〕。その問題意識は、一九六〇—七〇年代の、国家権力による教育支配を批判する視点に規定されていたものだが、それも結局は日本の近代教育を説明するための研究であった。

近年は、いま直面する教育の問題群に歴史研究の立場からいかに応答できるか、この点を私は大事にしている。「江戸から近代教育を透視する」という私の問題構成は、そのころみにはかならない。つまりこれまでの視点を反転させ、江戸の側に視点を据えて、近現代の教育を見透し、そこから近代学校の歴史的特異性をあぶり出す。それによって近代国民教育の自明性を疑い、多様な教育の可能性を示唆する、という戦略である。それと同時に、またそれにもかかわらず、「江戸」からの視線は日本の内部に持続

する（自覚／無自覚を問わず）教育の文化的土壌も明るみに出す。それは、皮膚感覚のように身体化している教育文化の存在を提示し、現在もその一定の特質が刻印されていることを確認する作業でもある。（二六三頁）

ここには、前著からの視座の転回がわざわざ語られている。「江戸」を近代日本の「源流」と指定するような視座から、「江戸」を近代日本の外部に指定しそこから近代日本を捉えなおそうとするような視座への転回である。このような視座の転回にもなつて浮上してきたキーワードが、「学び」の文化であり、そこにおける「模倣」と「習熟」であり、「身体」であり、さらには「メディア」であった。それらについては、二冊の一般書ですでに論じ始められてはいたものの、専門書で体系的に論じられることになったのは今回が初めてである。著者は、「皮膚感覚のように身体化」している「江戸」の「学び」の文化」の存在を提示しつつ、「現在もその一定の特質が刻印されていることを確認」しながら、「江戸」の側から、「近代国民教育の自明性を疑い、多様な教育の可能性を示唆」しようとするのである。

## 二

いま挙げたようないくつかのキーワードの結節点をなし、今回の著書の実質的な中心に位置しているのが、朱子学者貝原益軒（一六三〇—一七一四）である。著者は、『大疑録』にのみ注

目することによつて益軒を古学派の前哨と位置づけてきた日本思想史研究者の議論を批判しつつ、また、益軒を明代朱子学との関係において位置づけてきた中国哲学研究者の議論を積極的に踏まえながらもさらに踏み込んで、「江戸」の側から、また「東アジア思想史」の観点から、益軒を捉えなおそうとする。

著者は、益軒を、明代の朱子学——なかでもとくに理気一体を強調し「理は気の理」と捉えるような流れ——の周辺に位置づけたうえで、その「気」の思想に注目しつつ、「江戸」の側から、さまざまな論点を引き出してくる。たとえば、「江戸」において広く読まれた『養生訓』は、たんなる養生の書ではなく、「気」の思想を基盤とする身心関係の捉え方に立脚した修养論として、心の問題をも含みこむ書であった、という論点。また、「気」の思想の基本にある「天地生生」の思想からは、人々の営み——とくに生産活動——を「天地の恩」にこたえ「天地に事える」営みであると意味づける益軒の道德論が生れてきて、「近世後期の民衆の世界への儒学の普及」といった「豊かな思想の展開」の一流流となった、という論点。また、模倣と習熟を基本とする『和俗童子訓』の教育論は、「気」の思想では身体の契機が重視されることから提起されてきたものであり、J・ロックの教育論に比定するような近代主義的な評価によつてはその可能性を捉えざることはできない、という論点など。著者は、「気」の思想という視点を日本の近世思想史のなかに持ち込むことによつて……近世思想史も、あらたな

構想のもとに書き直される可能性がある」という(三九頁)。

また、「氣」の思想から益軒の「事実に即する」思考が生まれ、具体的なものごとに幅広くわたる益軒の学問が展開されたこと、そしてそのように多面的に展開された益軒の学問に通底していたのは「民生日用」の意識であったことが指摘される。著者は、「今の時わが輩才学つたなき者の作にて、いはばぬかみそひしほの製法をしるせる書も、民用の助とならば有益の書也」(『文訓』)、「民生に助有れば、方技の小道を執りて世儒の誹議を受くと雖も、亦た辞せざる所」(『慎思録』)といった益軒の言葉を引いているが、これらが近世日本の思想上いかにラディカルな発言であったかは、著者によってはじめて十全に明らかにされたと言えよう。

さらに著者は、「益軒は、一七世紀に出現した出版メディアというニューメディアを活用して、読書して学ぶ近世の読者層を成立させた。彼はそのための文体と思想の語りを創出した」(二頁)と述べ、「民生日用」の意識に基づいて多面的に展開された益軒の学問が一七世紀に京都で成立した商業出版と自覚的に結びついていたことを指摘する。また、著者は、晩年の益軒が仮名書きの書物を盛んに出版するようになる転機として漢文の『大学』注釈書である『大学新疏』の出版計画の挫折を指摘するとともに、のちの第Ⅱ部第八章では、『大学新疏』からさらに踏み込んで近世日本における「四書学」の受容・展開・変容を論じて、山崎闇斎(明代四書学への対抗)・伊藤仁斎(四書

学の脱構築)・荻生徂徠(五経中心儒学の成立)などの新たな位置づけを示そうと試みている。

その第Ⅱ部では、重心を貝原益軒からメディアに移すかたちで、議論が展開されている。そこでまず論じられているのは、一七世紀における舶載書の到来と和刻本の出現、素読・講義・会業という当時の学問の階梯についてである。なかでも強調されているのは、近世日本の学問の言語としての漢文ないし漢文訓読体を身体化する、素読という模倣的・習熟的学習方法の意義である。著者は、「近世においては、訓読体漢文となった経書の聖人の言葉と概念を駆使して、知的活動を行っており、そのことが、近世の思想や人間形成に決定的な意味をもたらした」と指摘し、「子ども期に「身体化」された訓読体漢文が、近世の知のメディアであったことの大きな意味を改めて確認しておきたい」とする(一八六頁)。

さらに著者は、さきに触れた四書学の問題について論じたあと、心学道話の問題を取り上げる。著者は、石田梅岩とその門流についての従来の研究は、梅岩の思想を高く評価する一方、「それとつらはらの関係で」、手島「堵庵とそれ以後の思想には、梅岩の思想の剝落や転落の歴史しかみて取」っておらず、「堵庵以後については、ただ教化史のうちに事実としてその名と事跡が記されるのみで、それらが思想史研究の主題とされることはほとんどなかった」と指摘する(二〇七頁)。著者は、このような研究状況にメディアという観点を導入することで、心学

道話を捉えなおそうとするのである。

著者は、「梅岩は「開悟」によって、文字をメディアとする経書注釈の学問世界から脱出し」、「書物(文字)を媒介とせず、口語(音声言語)によっても「学問」は構成できるのだ、という確信に達した」とする(二二四頁)。このような観点からすると、手島堵庵以後の心学道話は、梅岩による「学問」の捉えなおしが切り開いた可能性を具体的に展開したものである、ということになる。そして著者は、心学道話とは語りの技術こそがその本質をなすようなマス・ローグの教説であったとし、石門心学はこのようなかたちで梅岩の切り開いた可能性を具体的に展開したことにより、「それまでの「学問」からは疎外されてきた層の民衆を対象とすることができた」と評価する。「文字と書物を媒体」とした「益軒と石門心学は、階層的に補完的関係にあった」とする著者の指摘は説得的である(二二九頁)。

### 三

「江戸から近代教育を透視する」という「問題構成」に立つて近世日本の「学び」の文化を多面的に描きだす本書の叙述は説得的であり、著者の意図したところは十分に達成されているといえるだろう。とはいえ、疑問に感じられる点も皆無ではない。以下、四点にわたって評者の抱いた疑問について記しておきたい。

まずは、一点目について。本書における著者の方法的試みを

特徴づけているのは、「江戸」からの視線」がとられていることに加え、「メディア」という観点が導入されていることである。「メディア」という観点が導入されたことにより、貝原益軒や石門心学について、あるいは近世日本の「学び」の文化全般について、明らかに変わったことは多い。しかしながら、「メディア」という観点を導入するのであれば、発信する側の問題だけでなく、受信する側の問題も扱われてしかるべきであっただろう。たとえば、貝原益軒が出版メディアの利用に自覚的であり、そのことが彼の仮名書きの教訓書の盛行をもたらす一因となったのだとしても、受け手が彼の発したメッセージを彼の意図した通りに受け取ったとは限らない。むしろそのようなことはありえなかったのだとすれば、受け手は彼のメッセージをどのように受け取ったのか、また彼のメッセージを受け取ったことはその受け手の主体形成にどのように関わったのか、といったことが、個別具体的な事例に即するかたちで明らかにされる必要があっただろう。

次に、二点目について。本書では、近世の学問の基礎は儒学である、ということが自明の前提とされており、その枠内で議論がなされている。もとよりこの前提は間違いではなかるうが、しかし、この前提を強調しすぎてしまうと、議論が当時の実態とは大きく食い違ってしまうようにも思われる。たとえば、元禄五年の『書籍目録』の時点でも、漢文ないし漢字片仮名混じり文で書かれた学問書は、儒学書よりも仏教書のほうが圧倒的

に多かった。仮名書きの庶民向け教訓書も、大半は仏教的ないし諸教一致的な内容であったと見るべきであろう。また、梅岩の講釈から堵庵以後の道話への展開におけるマス・ローグの教説の成立という論点についても、仏教唱導という補助線をもう一本引かなければ十分に歴史的に位置づけることはできない。本書は、こういった点で、メディアという観点が十分に徹底されていないように私には思えた。

たとえば、メディアという観点から近世前期の思想空間を問題にするにあたって、いちばん鍵になる人物を一人挙げよと言われたら、私は、真宗僧にして日本最初のベストセラー作家（著者の名前で本を売れる人物）であった浅井了意を挙げると思う。本書では貝原益軒の仮名書きの著作の新しさはもっぱら儒学史の文脈でしか議論されていないのであるが、しかし、当時のメディア状況に即するならば、浅井了意の著作などとの関係を考えることのほうがより重要だったのではないだろうか。メディアという観点から貝原益軒や石門心学について論じるところからさらに一歩踏み込んで、メディアという観点から近世思想史研究の枠組自体を問い直すような作業が今後は必要であるように思われる。

次に、三点目について。本書では、近世日本における明代の「四書学」の受容・展開・変容について、かなりの紙幅が割かれている。しかしながら具体的に取り上げられているのは未刊に終わった貝原益軒『大学新疏』と毛利貞斎『四書章句集註』

『諺鈔』くらいで、明代四書学受容の基軸であったはずの藤原惺窩『龍頭評注・鶴岡石齋刪補訓点』、『龍頭評注四書大全』や熊谷蒭斎『龍頭新增四書大全』、あるいは宇都宮遜庵『龍頭四書集註』は取り上げられていない。また、貝原益軒『大学新疏』については、実際に刊行された中村惕斎『四書章句集註鈔』や室鳩巢『学庸章句新疏』との比較が必要であると思うのだが、そのような比較もなされていない。この点については、もう少し徹底した分析が必要であったらう。

また、「明代四書学」は一八世紀末の日本において、役割を終えたといってよい」（二〇四頁）と評価されているが、近世後期に陸隴其『三魚堂四書大全』や汪份『增訂四書大全』が広く読まれたのは間違いないし、古賀精里『大学章句纂釈』、『大学諸説弁誤』や金子籍山『四書纂要』はともかく、安部井帽山『四書訓蒙輯疏』が広く用いられたのも確かであろう。かつて荻生茂博が指摘したように、清初において朱子学を正統教学として再構築しようとする動きを、寛政異学の禁以後の朱子学者たちが自らの課題と関わる動きとして参照するというような連動性があったのであり、前引の評価は一面的であると言わざるをえない。むしろ、明代四書学の清初における再構築と、寛政異学の禁以後の日本における朱子学の再構築とはどのような関係にあったのかということが、問われる必要があると言えよう。最後に、四点目について。著者は、「昔の教育や学習がよかった、だから復活しよう、などと短絡的に主張するつもりは

毛頭ない」という(三二一頁)。本書における著者の議論がそのように短絡的なものでないことははっきりしている。しかしながら、「江戸から近代教育を透視する」という問題構成に立つたかぎり、近代との関係において「江戸」の評価が図らずも高まつてしまうということは当然ありうるし、本書第一章で表明されている「氣」の思想への共感などを見ると、著者もそのこと自体を否定するつもりはないようである。

だが、そうだとすると、「江戸から」の視座の射程についてのより厳密な方法的検討が必要だったのでないかとも思えてくる。著者は、本書冒頭で、いま「学校が揺らいでいる」とし、「子どもの教育や学校の問題」をとらえるためには「現在進行中の「メディア革命」を視野に入れ」る必要があると説く(二頁)。ここでは、「江戸から近代教育を透視する」本書の視座が近代以後をも射程におさめうるということが含意されていると言つてよいだろう。しかしながら、本書を読み終えてもこの含意は含意のままにとどまつて具体的な展望を与えられることはないし、またもし近代以後への展望を積極的に示そうとしたらそれと連動して「江戸」の評価が異常に昂進してしまうのではないかと危惧される。「江戸から」の視座はこのような方法的隘路を抱えているのであり、著者はこの隘路をどう擦り抜けようとしているのか、聞いてみたかった気がする。

以上、評者の抱いた疑問点についていくつか述べたが、これらの疑問点は、性急に著者に解答を求めるべき疑問点ではなく、

むしろ近世思想史の研究者によつて幅広く取り組まれるべき今後の課題であるというべきであろう。このような問題の地平を開いた本書の成果をあらためて確認するとともに、今後に残された課題が一つ一つ解決されていくことを期待したい。

(大阪大学准教授)